



利石
2969
2



Handwritten mark or character on the right page.

Handwritten mark or character on the right page.



句尻身

章なくと祿乃うらなれぬ大と
 物好奇せし雜記集よりとりて
 此一局をたしし修通なる句を
 自由なる所より取らば此は此の
 詞のそにかあはれ古詩古歌經類
 ともなり一語を多くあつても
 やはくをたふるその句は切あはれ
 ちらふをたしし丁に鼓中つみ
 初めをたしし鼓中つみ



しるし自然の合意
文句ありしをいひて一句
その本意ありて

謠物

三十六番

肅山

飛螢我も体心苦しい

晋子

かぐみろ魚ら良川流ふ

酒債よし且暮月もく
影棠

花のたれ切溜乃 桶 山

断くも人々ぞん 刀持 晋

橋あり徒士ハく 社笠 棠

掛造り所を志望の浦あり也 山

鏡も只明し 志乃 祢 名 晋

長く人々やみ野に隠せ住 棠

うよほれもみ患のや 山

山の神妻えんきり 同 晋

立ちる者や 根乃 窮 棠

燦掃子笠も藪もうつつけ
 井丹母酒をこき菜こと
 佐屋回りかひけしせいせの海
 四つ乃鼓い月のおほり夜
 花の床三寶加持の行ひあり
 又大長を節乃果月
 うちんあゝ怒るゝと角螺サイ
 携るまゝももある一の日記
 山 菜 晉 山 菜 晉 山

詫い觸うあゝら烏帽子川の手
 時くま山くれまれ世中
 子銀己の十色も一なりと
 子の母や子みちりののみやく
 数珠切ぐ三巻るいのり色
 酔し序山乃音乃ゆきの
 ちり袖も子忘き舞の杖
 あり分髪を肩の縫わけ
 山 崇 晉 山 菜 晉 山

月乃宿さうなをちてあは傷ハ 晉
木取勢も通用み茶より秋 崇
小舟このおちかくさこハ 大舟 山
心つらひとあめをくくお伯母 晉
木賊の力をさくくおの所化の時 崇
あひもも色北 魚上る舟 山
やふ八乃おをこくとあを色徳志を 晉
あこましくと春乃 酒盛 案

癸酉八月廿九日乃昼亡父
葬送の場あり崩心乃悲を
懐ちて四生乃起あをさる 晋子
一 淋 中 蠟 ともあはも 服 以
とてふ母も 片 神 法 疾
世の破案ありつらや言あは
あはしきしきもあは乃酒
新金と思しぬ氣より涌出
礼者の為はみりも雪汁

楽初もきこなくんがる歌賃る
 大名持乃畑作あま
 変せぬる櫓のふきの雑司谷
 茶碗のよくらほあし
 山家でい遊行も皆所をふらふ
 今産婦しんじ猿の子
 鳴りの声 嵐ましく古戰場
 石地ろのまきと雪籠を糸

草庵の藪をくぐらねる谷のあ
 難の同屋北井園し 屋
 きほひある鉢裏はのくみ人
 ありわきしゆやふの編笠
 七ツ年お梅さうもいらあし
 仕向せぬ慈政もとくはれ
 花乃存子日るしんじ川
 海苔ちりかりと考察切を嘯

目うゝ死耳うゝ死こゝれは
みは見えしゆ以成をあり
以後はこゝろのこゝろ思ひ
世はさくくみハ邪正衣服
立込て傍房多た中子小紫垣
何み追きし井ハある翁
物すこふとあわ所ハ男きき
あこゝみは平伴の報

あつとつとみはみは
四夜の仕着セ振るる
鄙人を舅でいこゝろ
齋のこゝろみはみは
風呂簾しりみはし月夜
紋乃あるみはいつよ
芋の根みちいよ地のを付
殺生石法多ぶるる

田分の園と云ふなり 菰(ひよこ) 菰(ひよこ)
旅(あそび) 旅(あそび) 旅(あそび) 旅(あそび) 旅(あそび)
何(なに) 何(なに) 何(なに) 何(なに) 何(なに)
こ(こ) 僧(そう) 都(と) の 足(あし) すり 乃(なり) 濱(はま)
新(あらた) 新(あらた) 新(あらた) 新(あらた) 新(あらた)
牛(うし) 乃(なり) 乃(なり) 乃(なり) 乃(なり)
漸(ゆる) 漸(ゆる) 二(に) 所(ところ) 控(とど) 規(ぎ) の 藪(やぶ) 乃(なり) 色(いろ)
あ(あ) 一(ひと) ろ(ろ) 是(これ) を 墨(すみ) 餅(もち) つきの 白(しろ)

佛(ほとけ) 佛(ほとけ) 佛(ほとけ) 佛(ほとけ) 佛(ほとけ)
二(に) 本(ほん) 一(ひと) 様(さま) 々(々) 々(々) 々(々) 入(い) る

幼(わか) 幼(わか) 幼(わか) 幼(わか) 幼(わか)
見(み) 見(み) 見(み) 見(み) 見(み)
衰(し) 衰(し) 衰(し) 衰(し) 衰(し)
誦(じゆ) 誦(じゆ) 誦(じゆ) 誦(じゆ) 誦(じゆ)
を 真(まこと) しり 此(こゝ) 辨(わ) べし

東順傳

芭蕉稿

老人東院の松氏ありてその松子
 江初聖田乃農士竹氏と稱ス松氏
 といふそのち晋子り母るしそよる
 其のありしころ七十歳ありしを
 の秋る月病を枕のころは極ち
 花鳥の情ありと悲しむ思ひ限
 己の床れおりてて非れをきか
 孫よりしぬの白をわみし大
 築か典のころを中一隠るあり
 時時をそんてき乃産と一なる

何某のかりてる俸給をばりて金魚
 龍塵乃松すはしと松とも世孫
 ちのいふ名けの衣をてり杖を
 携て業を捨つ既る六十歳のいぢ
 かり市店を山居るのち一樂心
 とらるるをそなふん机をさるぬす
 才とせちまの其筆のゆきし車と
 こかくしるし湖上の生をて東村に
 物りしと你是ゆ大徳朝市乃
 人なるる

入月乃松を批れ四隅に

行草躰 二十四句

悲悲鳴

晋子

ちんぢいひく^{カニ}蝦^{カニ}こころある涙うお
 並^{カウ}を色鶴の^{カウ}おの^{カウ}もの
 春荷と^{カウ}いどの^{カウ}張ん^{カウ}かひひつる
 おれし^{カウ}を^{カウ}お^{カウ}けと^{カウ}焼物
 七食めと^{カウ}世る^{カウ}を^{カウ}志^{カウ}る^{カウ}る^{カウ}あり
 ゆ^{カウ}ら^{カウ}ひ^{カウ}の^{カウ}く^{カウ}し^{カウ}葬^{カウ}乃^{カウ}と^{カウ}お

氣子つきて小便濁る水の昏
 卅日りあると家より顔
 我恋らんの内儀をわらわ
 湯豆腐乃湯のさあつてお
 系杯おの寐やうをおもひ
 伏見乃場所を家くとして
 炎昔くく風土記のなつ
 芋あつてゆる城中小畑

川をり川板は一なる叫小猿
温泉入る途は山るる月
むの宿ひつとて酒市を拍カり
茶タリあはらるるかじ菜の味
た
この目張十里ハありくモトイ路のこま
そあゝの薊子せそふと妙房
ほたけきも稲子餅を入して
孫をひらびし息笑於祖母

東國ハフ長泊りもなすけり
桐のいさしなみあり月
吹出ま麻もさしふ笛の音
つらしやうよ酒カチイ陶乃酒
病中もど乳母の尻子あそり
琴の下極上へ何を入ん
ま新てもよふか時おん泊ぬの境
市女うらゝ新茶屋さしり

のちをるる車の後く牛の咭
切を突きし鮎 飛付ク
花 浦んくを ねく面を 手す
傘 少りて 暮るむ 春玉

五月廿八日

浅茅り原々 あらう

晴るくき

遠をむる

晋子

ゆきもろく 蚤ちいさ 蛇の原

松乃る 蚊めけし 涼い 柴雲

扇の 扇ひひりつ 夏ふ 介我

二つ あらう 蛇とむめる 吾

あけく 刀の多ふ 月 我 痛 果

衣もよに よみ 旅の 疾く 我

の 菊ら 花 何くる 娘の子 音

包と 包と げ 饅 路る 笛 糸

神のつとてし狐佛堂を乞はし
和田恩智等々知しありん
炭賣の侍らる初と舞ひし
毛をむしふあや活かぬ雛我
ら新も籠く百らの菜いつりし
かきしとる花乃海乃系
茶箱初くもせし恥し木家
乃を女房あはく唐紙等

神の月十年あはれまきし
片乃悉く歸をみ祭海打我
以此乃鷄けをし菜の湯せん
店流の尼乃まあははるる
我うく泣くゆりし小船改我
教くうあのかる鳴費音
黄鷹れ鳥くおまうし松より
以中燃し辭さあか見我

物神

正

結成の垢うち掃し 以成る 香
車成ぬいし 御す材木 系
白き垢の垢を掃くぬ下谷を 我
占ひのせむ 神子の宿札 晉
法持を五等と 筆をうけしを 系
おほいあつらふ志ある吹笛 系
旬々の色しうけし けりき 晉
しらぬくく 菜味にわさ 系

そのらあし酒のし脈ハ飛を川 系
世る孤景やちりし我山 晉
汁^{カキ}味もを報るたあらん 我
あを夜秋きく月の鶯 系

約集

巻一

六月八月 慶應

聞指

管教お玉際し見もる糖りけり

散くく居く遠く灯を垂音子

糸標邪広み然まてりよらん山蜂

蝶のゆく糸を酔し押ユル指

言の月既乃額のかちんし音

所胎水とく物くほちん 塔

川の氣体をもあせ悲し恨本此山指

何しきれ音乃豆くゆゆる音

目のよせと蠅のへあるをたあ 塔

就乃穢みくもや何く乱指

は水をうりらくとあめふ音

基骨れ掃きとあ付く壘 塔

一管の色如賀着人の衣りし 指

やうしての下え如膏のるは月音

五

面^シ疾の形もあきハシ^シル^ル指
すまよ乃刀帯し^シを^シある^ル指
濱^シの目^シを^シは^シる^ルむの^シ色^シ指
貴^シの^シ日^シの^シり^ルを^シい^シ乃^シ而^シ指
よ^シう^シい^シ海^シの^シ手^シ習^シら^シを^シた^シん^ル指
の^シる^シは^シな^シし^ル半^シ井^シの^シ門^シ指
孝^シひ^シを^シ食^シれ^シ中^シと^シあ^シる^シ中^シと^シり^ル指
小^シ鯨^シを^シ砂^シと^シ斗^シる^シ塩^シ時^シ指

送^シく^シせ^シて^シ送^シり^シ見^シ之^シ下^シ涼^シと^シ指
四^シ月^シの^シ脛^シと^シい^シと^シな^シる^シ運^シれ^シさ^シ指
燥^シ掃^シや^シが^シし^ルと^シさ^シり^シに^シ袖^シの^シる^シ指
小^シ海^シに^シも^シら^シな^シ指^シの^シ鑿^シ口^シ指
所^シを^シく^シ階^シを^シあ^シり^シけ^シと^シ踊^シん^ル指
終^シる^シ印^シし^ルも^シる^シ見^シ白^シの^シ舌^シ指
梨^シ蔕^シ葡萄^シの^シま^シり^シを^シ水^シ有^シ指
扇^シ乃^シ下^シへ^シあ^シら^シる^シ指
袖^シの^シ蠶^シ指

まうとやうにほろりと老の骨指
飯食のつよは白山の温泉地
静ある猿の斬るやうに音
脱し万ある小菘の松明お
大枝もむ盗人もほくみり
策とてうらみりてある子音

壬申十二月廿二日即興

芭蕉

赤らしてむ入探進んぢつた
隙こむあゝうらうらるる影
目あゝあははかりなきりて音子
お孫のよらめりき諾小黄山
そ月つらあさけしんか厚桃隣
出代るこしおとせりま浪杏

岡^三中成まぬいひるる 穂の香 棠
 肩^一しや^一ち^一あ^一か^一る^一居^一る^一音
 反^もも^も子^菜糖^をか^てて^茶の^を杏
 茶^を煮^し也^は泊^れ茶^寮蕉
 下^法の^不好^乃も^くあ^らし^し山
 つ^らい^い猫^乃力^をひ^らか^す隣
 む^つつ^つや^襟あ^きし^し也^楓の^自棠
 硯^はな^あと^らひ^やせ^う何^晋

長^の田^森の^くあ^しあ^く蕉
 こ^のす^のみ^をま^い唇^味
 ま^いと^い嘆^きを^中瓦^鈴の^月音
 ら^んじ^いま^いく^さ遠^{サカ}ル^疫棠
 思^はる^和当^もな^を舟^の杏
 寺^みの^舟を^揚る^箱戸^極山
 山^をれ^りう^るは^比を^志つ^つく^蕉
 海^のう^る舟^を合^歡の^下音

くみむくも梳へる床の
思をせ再々昼つゆ休
焦くしあへ曹洞宗の
焦くしあへ曹洞宗の
すくすくすくすくすく
底ほく先乃走ひくふ
雁山

松茸を近江海うへ
老ふは海邊より
むね名みく
付けし中しを
こころの乾乃
隣

竹

木

六月廿四日真

結ニ庵河邊

吟

舟人の裸し金や雲外峯

柳し枝りし川を飛蝶 音子

百草の屑や祀時をしかあはし 沾徳

柄我たるりし月の夜は 吟

蹴子乃肩をさくくして散る 音

金具を止をりし水濱縁 臣

物しをるも然もろくふ家の丸 吟

白髪ゆるる二のけし乃蓋 音

冬枯も 壱ウカが 變岩青松寺 臣

星おもし海も 圃クモイキの 霽 吟

恙せしきぬの襟ぐみおは 音

見し投入し用の切糸 臣

あしし雨衣をるる川簀垣 吟

糸しお摸あさか 吟 音

下あえろのそけりは 志老し
志や心ろをくぬ 志老し 目
食のあき志老の山 誠目も 雪
ま目をうけり 芝のあ 紀
雉福らよ 笈えの楯タテは 鳥
鞆箱ひらり 尺さ び
近つる六乳母をうり あり 傀儡
お暴り くら 次 交り 相殿
音 成 所 音 成

燦々木水地のはり あり 音
荷をとくれり 嵐 出る 舟
僧や皆耳を寒う 衣山下 足
粉河の轂タテ 教々あり 音
恨くらし 卯乃目利 笈え 音
碎くとも力のつらき 所 珠
あひらんと 階手 扱ツクし 月の 乳
ほくきりこの 志老し 音

惟子よりやまこころゆゑの音
たふる^{ハナタラ} 餓もこれ同じあめ
物輕きあまてハ貫氣し
世よりちりりり木玉場の歌
阿のやうな女子成て花の陰
山吹おもしろくうゑの音

三子草一葉をよそに
おとよめ雨に花よりわ

湖月

雨乃脚 日半^{ハシタ}あはれ
桶の蓋とてぬの 荷 素牙
寂^{イサ}椿^{ハヤ}くハきの木槌をうつりひて紫紅
新^{イナ}よりあはる京昆布の色 音子
粗^コ摺^ツもよし女ありし月乃庭
掙^{ツツ}乃 石れあはれぬのぬ 月

約中

音

此後を推し心をおそく
焼ヶ山越、力をく、白き
下糸の茶をく、く、編之り
揮、をまらるるも恋のある顔
一、つ、ハ、扱、を、乃、勝、手、志、つ、る、に、
膝、立、や、あ、く、紙、を、く、い、と、く、
甲、橋、と、く、く、く、く、あ、ま、ま、を、冷、の、森、
あ、ま、ま、白、く、く、茶、あ、ま、ま、い、る、酒、月

舟の舟も枕をく、く、く、く、く、く、く、
鴨乃目く、く、く、く、く、く、く、
難、あ、る、籟、の、松、此、花、柳、
芝、を、く、く、く、く、く、く、く、
春、る、や、海、り、碁、石、の、く、く、く、
下、着、を、く、く、く、く、く、く、
市、切、の、み、の、も、ま、ま、飛、で、よ、い、
く、く、く、く、く、く、く、
醒、く、誤、ッ、く、
面、
く、

舟中

舟中

はあくと追跡舟乃来いよ
一向宗乃 南无阿弥陀佛 音
借素袍多よあしよ安し
法後所免の擗はく門 月
切飛治めめゆゆる部乃 音
板子を見よと妻帯此免徒 紅
十八がすまふよ色をぬくむし 月
木曾木つるゆる月の川音 音

百姓の位よいそ女良乃社 音
お行治平の人乃世中 紅

あはれよ心を宿しそ大いし
あなよもいそん廿二句
よーよーよ

白中

音

七月廿五日

龍深川 兼光院

嵐雪

つくり木れ糸をゆるんおのん

雨^レかいかいき^レ時^レく^レま^レる^レ出

神叔

初^レ鞋^レや^レく^レし^レ荷^レ前^レの^レ宿^レの^レん^レ介^レ我

月^レの^レ舟^レあ^レる^レ船^レの^レち^レふ^レ | 音子

忘^レれ^レの^レ控^レし^レ蘇^レ鉄^レの^レ塩^レを^レお^レん^レ叔

し^レつ^レる^レ何^レも^レ又^レも^レなる^レし^レ 雪

ど^レち^レ中^レう^レそ^レを^レ先^レあ^レる^レ眠^レ音

盡^レう^レる^レく^レら^レに^レ場^レを^レ志^レる^レ我

つ^レく^レと^レ甘^レ中^レう^レる^レも^レこ^レり^レ雪

先^レに^レ精^レお^レら^レく^レ岐^レの^レゆ^レ先^レ叔

ま^レを^レ茶^レの^レ巻^レけ^レる^レ間^レの^レ方^レ我

隣^レを^レ男^レ猫^レに^レ方^レを^レ毒^レ音

い^レん^レは^レい^レの^レ衣^レハ^レ氷^レる^レ神^レの^レ角^レ叔

詠^レづ^レと^レ好^レ家の^レく^レも^レも^レ雪

白中

音

花村を聖天町向一のわん晋
浮福福より一暮を遊ん
月雪子寸切らむの寮信有る
固栗りきつて遊山絶り
二三俵川抜ちまのつあも
るりゆきまて迎へ盗人
大考の川幅ゆる向ふ風
一小を焚^{タイ}て仕まふ松方
晋

此京舞あつたえとく深山晋
めれり用され骨をさるむい
あつたえとくあつたえとく
味塩うつも老乃碎一狂叔
ろろろれお替^{カハセ}とのよ大晦目
ともははをさるるるるるる
聊や湯女子泣きしてあつたえ
狂詩乃神り於人の月雪

高き香 飄 覃の 殿ケタゆく びより 晋
 田の 痛しく 鹿の ぬきて くる けし 秋
 心 敬の 長 恨 志く くる けし 雪
 赤 染の 芥 よ 寒 けり 足 ぬる 秋
 下 市 乃と あり 蹴 立てる 甚 盛 秋
 弱 の 行 終の 鈴の 鳴 け 晋

しのぎの まり けり けり けり 句

寒玉

妙 楚ハ 陰 右も あり けり けり
 猿 戸の ぬき けり 夕ら 色 乃 菊 桂花
 回 乃と せり 月 乃 色 ぬき けり 紫 紅
 物 の と せり 色 ぬき けり 紫 紅 秋色
 道 乃 色 の 眠 乃と けり 色 ぬき けり 晋子
 卯 者 乃 色 ぬき けり 色 ぬき けり 玉

手はあつてあつてあつて酒のなる花
新裁タチたつて日つたり乃紅モト昏
四十より繁のつやあつて玉椀の色
海あつたり大い薔やあつて紅
らつくと新ツラハ柱ハ舌子ほつたり音
を偈をそくをあつてあつて花
永積を物とあつてあつて世持玉
唐紙も何れも十分の作音

山柿乃門のあつてあつてあつて色
旁みまつてあつてあつてあつて玉
おむをうりあつてあつてあつて花
四条で買ったけあつてあつて杖色
彼岸中あつてあつてあつてあつて
瓶下あつてあつてあつてあつて
米搦のあつてあつてあつてあつて色
造あつてあつてあつてあつて花

の中

花

